

《研究ノート》

宮沢賢治に関わるアザリア同人の 作品・書簡・日記等における言及

平澤 信一

■ 要約

アザリアは、盛岡高等農林学校、大正四年農学科第二部に入学した宮沢賢治、小菅健吉と、大正五年農学科第一部に入学した河本義行（俳号緑石）、第二部に入学した保阪嘉内の四名を中心とする謄写版の文芸同人誌である。大正六年七月一日に発行された第一号から、大正七年六月二十六日（推定）に発行された第六号まで、全六冊。大正七年三月十三日には、同人・保阪嘉内の同校除名処分という衝撃的な出来事もあった。現在、最も資料的に優れた『新校本宮沢賢治全集』第十六卷（上）（平成十一年、筑摩書房）には、賢治に関わる「同時代文学者の作品・書簡・日記等における言及」があるが、アザリア同人のそれが採録されていない。そこで本稿は、これまで公開されている資料に拠って、これを試みたものである。保阪嘉内によるものが26件、河本義行によるものが13件、小菅健吉によるものが5件の計44件、掲出された。スクラップブックにアザリア同人からの書簡が貼り付けられ、大切に保管されていた保阪嘉内だけあって、河本、小菅においても、保阪宛の書簡が大半を占め、賢治に言及するものでは、彼宛でない書簡は、資料39の河本から小菅への葉書一葉のみである（しかもこの葉書は送達不能により返送）。保阪は賢治からの73通もの書簡も保管していた。これを初めて公にしたのが、保阪庸夫・小沢俊郎編『宮沢賢治 友への手紙』（昭和四十三年、筑摩書房）であった。以来、賢治と保阪との関係は、特別なものとして扱われてきた。本稿は『新校本宮沢賢治全集』に収録されなかった、それぞれの同人の賢治に関わる言及を集成したものである。これにより、新資料と見做し得るものの発掘や通説の問い直しが可能となっている。

■ キーワード

アザリア・宮沢賢治・保阪嘉内・河本緑石・小菅健吉

■ Key Word

Azalea・Kenji Miyazawa・Kanai Hosaka・Ryokuseki Kawamoto・Kenkichi Kosuge

アザリアは、盛岡高等農林学校、大正四年農学科第二部に入学した宮沢賢治（岩手県出身）、小菅健吉（栃木県出身）と、大正五年農学科第一部に入学した河本義行（俳号緑石、鳥取県出身）、第二部に入学した保阪嘉内（山梨県出身）の四名を中心とする謄写版の文芸同人誌である。大正六年

七月一日に発行された第一号、同年七月十八日発行の第二号、同年十月十八日発行の第三号、同年十二月十六日発行の第四号、大正七年二月二十日に発行された第五号、同年六月二十六日（推定）発行の第六号まで、全六冊。大正七年三月十三日には、同人・保阪嘉内の同校除名処分という衝撃的な出来事もあった。小菅健吉は同年同月十五日の卒業後、まもなく渡米した。現在、宮沢賢治に関する最も資料的に優れた文献は『新校本宮沢賢治全集』全十六巻・別巻一であり、第十六巻（上）補遺・資料篇（平成十一年、筑摩書房）には、賢治に関わる「同時代文学者の作品・書簡・日記等における言及」があり、草野心平、黄瀛の作品、高村光太郎、富永太郎の書簡、中原中也の日記が収録されているが、アザリア同人のそれが採録されていない。そこで本稿は、これまで公開されている資料に拠って、これを試みたものである。事項の初出の年月に従って、保阪嘉内、河本緑石、小菅健吉の順に掲出した。以下が、その一覧である。

*

●保阪嘉内

【大正五（1916）年】

1、四月二十二日（短歌日記）

晴れ、宮沢氏と盛岡中学のバルコンに立ちて天才者啄木を憶ひき夕陽赤し、

2、五月一日（戯曲「人間のもだえ」）

□全能の神（アグニ） 保阪

□全智の神（ダークネス） 宮沢氏

□恵の神（スター） 岩田氏

3、五月二十三日（短歌日記）

宮沢氏集より

新緑の小枝吹き折るあらしにも

高鳴ける鳥 ハラミツの鳥

そらくらく木々のわかめはゆるげども

われは無明をいつぞはなれん

4、七月二十七日（短歌日記）

麦調整、弥三郎来信、家、宮沢、作地、弥三郎へ手紙

5、八月三日（短歌日記）

晴、水田まわりの除草、作地先生、宮沢君来信、

6、八月十九日（短歌日記）

曇、植物採集にゆく、宮沢氏来信、家庭と庭園読

7、八月末（短歌日記）

■名歌私抄■

小さな岩かけ崩れ降る音と、谷に火たきて夜をあかしけり（陸中、宮沢氏）

8、九月三日（短歌日記）

晴 植物学汎論、宮沢氏、今福来信、后畑整地茶播付、夜韭崎行

9、九月七日（短歌日記）

曇、 葉整理、宮沢氏来信、畑整理、

【大正六（1917）年】

10、一月二日（ノート）

賀状来 宮沢賢治

11、一月八日（ノート）

風にまふ木の葉のごとう友の文、東京に来とかきこしにけり …宮沢氏詠…

12、七月八日（ノート）

馬鹿旅行日記 / 春木場まで（盛岡より） / 大正六年七月八日前零時十五分より / 全后二時十分までの間 / 全行者三人 / 小菅健吉 / 宮沢賢治 / 河本義行

【大正七（1918）年】

13、十月二十二日（河本義行宛葉書）

前略、宮沢賢、兄は近日中に盛岡へ出てゆく如き様子は無きや。ア誌に原稿を投じた人は誰もあるまい、あるか。近森氏の近頃の様子は奈何に。詳しく承はり度し。

【大正八（1919）年】

四月（歌稿『新しき生命』跋文）

14、おれはすべてのものに感謝せねばならぬ。 / その中ことに三人の人間としての人に感謝せねばならぬ。 / 南部雪の国の友。山陰の友。そしてそれは又今遠きアメリカにある友の事である。朋よ。

15、九月（歌稿『秋の始めより』）

花卷の / 賢治がしげんの秋の野の / 空のまんなかの / 雲を打つ槌（二十七日）

空は八重雲いきり立ち / 賢治が泣ける / 平原は青

【大正十（1921）年】

16、一月二十日（国民日記）

小菅健吉、河本への発信……河本より来信及詩集……賢治来信

17、二月十三日（国民日記）

東京活版小僧の賢治、アメリカの健吉浪人、河本見習士官、鯉沼蒙古王

18、二月十七日（国民日記）

健吉よ、賢治よ遠き華世らよ、我には高き早春の空

19、二月十八日（国民日記）

賢治の尊い運動、治男の真面目さ、みんないい人たちばかりだ

20、二月十九日（国民日記）

賢治、義行へ発信。

21、三月二十二日（国民日記）

賢治が泣き顔ぞおぼゆる / 遙けき市川国府台にのぼりて江戸川を見 / 東京の空の夏の煙を見るこゝち / 賢治 / 健吉 / 遠きものにしあるかな

22、七月十八日（国民日記）

晴 / 宮沢賢治 / 面会来（左上から右下へ全体に斜線を付す）

【大正十一（1922）年】

23、二月（「審判の日よ来れ」）

われは今アメリカの曠野—彼に於ては市民雜鬧する繁激なる街路も荒涼たる曠野にあたる—を彷徨してゐる K なる浪人の寂寥満る事なき心事を憶ふてむせんでゐる、しかしこれは又陸中花巻なる M—忍苦の人にもいい得る、否それ以上に亦これは人間苦にあえぎ困しむ Y—の上にも当ると思ふ、
【大正十五（1926）年】

24、四月十七日（当用日記）

小菅健吉を憶ふ / 宮沢 / 河本を偲ぶ / 盛岡、中の橋辺の桜花、今年も白く咲きてあらなん

25、十月十六日（当用日記）

一日ぼつねんとして暮す / 在米小菅 / 山陰河本 / 陸奥宮沢、を憶ふや切なり

【昭和三（1928）年】

26、二月六日（山梨県青年訓練所補習講義）

我が友、農村芸術家 M について

●河本義行（緑石）

【大正六（1917）年】

27、七月一日（俳句日記）

あざりや発行 / 一日、 / 学校にて

28、七月七日（俳句日記）

宮沢、小菅、保坂、私（夜一時出発 春木場まで）

29、七月十五日（俳句日記）

岩手山トザン、保坂、近森、長沢、宮さは、

【大正七（1918）年】

30、五月十三日（保阪嘉内宛手紙）

K 君、 / 宮沢さんが今土性調査で、出張して盛岡にゐない。”アザリヤ”復活についても話したいのだが、山の中に入ってしまったて出て来ない。しんみりと山の中で歩いてゐる事だらう。 / K 君、 / アザリヤは私と宮沢さんとで先づ最初の復活号はやるよ。また、東京の方にうつしてもらうかも知れない。原稿をどっさり送って下さい。

31、六月八日（保阪嘉内宛葉書）

宮沢氏帰盛。アザリヤ / 直に発行スル / 原稿ナカナカ / 集らぬ。

32、七月九日消印（保阪嘉内宛葉書）

今日も今日とて、宮沢氏は肋膜にて実家に帰った。私のいのちもあと十五年はあるまいと、淋しい限りなく淋しいひびきを持った言葉を残して汽車二のった。（アザリア発送した）十五日頃東京通過。

33、十二月十五日（保阪嘉内宛葉書）

全く今年は雪の降るのが早やかかった、今日は全く櫓を出した位なんだ。宮沢氏の事も小菅氏の事も知らない。私は冬休暇（拾二月廿日頃発）妻と一諸に山陰に帰国する。

【大正十（1921）年】

34、一月十八日消印（保阪嘉内宛葉書）

貴兄のところにはいいものがありますねといたうございます。其の上に華世さんと、百姓達があるとは、！それから健吉さんや、賢治さんの事を知らせて下すって有難う、健吉、賢治二氏の姿が

私の心に明瞭になった事は感謝に堪えません、私の一明二つについては、概して健康に育って来ました。

35、四月二十五日（保阪嘉内宛手紙）

一明は一時（私の入営中）殆んど死ななばかりに病んでゐたのだが今では反対に、頗る元気で毎日外で遊んでゐます。

宮沢君恋沼君の居所を知らして下さい、小菅君ニは実際失礼した、

36、十二月二十七日（保阪嘉内宛手紙）

宮沢さんから端書が来て私は救はれた様でした たすけ舟の様な端書でした。宮沢さんへ手紙を書きました。あなたにも誰にもお詫せねばなりません。

37、（友に送る）

H 君、/ 私は君の事を思ふ / 甲州の田舎で田を耕してゐる君を / 而して亜米利加大陸をさまようてゐる K を / 北国の雪の中で考へこんでゐる M を / 君のそばには百姓が居る / M のそばには日蓮が居る / K のそばには誰も居ない / しかもそれぞれに真実だ / みんな自分の道をもつてゐる / 君や、K や M の事を思ふと / 私の旅も孤独でなくなる

【大正十四（1925）年】

38、一月五日消印（保阪嘉内宛葉書）

賀 正

西曆一九二五

御無音の程 すみません

昨年の宮沢君の詩集すばらしく共鳴します。

日本詩人で佐藤惣氏が批評してゐました、

39、十月八日消印（小菅健吉宛葉書）

詩集への御言葉有難う、賢治氏の春と修羅見ましたか、あれは実にすばらしいものです、

●小菅健吉

【大正八（1919）年】

40、〔一月〕（保阪嘉内宛手紙）

アザリアの方はどうだね、経過は。一度ニ長い手紙をもらふより幾度にももらった方が心持が好いだらう。日本からの手紙程嬉しいものハ又とないよ。緑石氏や宮沢氏からの便りはないかね。

41、四月十五日消印（保阪嘉内宛葉書）

書きたい事はいっぱいだがその内ニかく。余りお茶を濁さぬ様にしろ !! 宮沢ハ如何した。河本ハ？ ハガキニこり種々ノコトヲ憶フ。

42、五月二十四日（保阪嘉内宛葉書）

手紙トハガキヲ受ケトツタ吾ガ友ヘ吾ガ誇ナリ、之ハドンナ心ダカ君ニハ分ルダロウ、緑石ヨリモ宮沢ガ心配ニナル、一日モ早く手ヲトレル様ニト待ツテル。オレノ心ノ生命トスツベテノ光リトガ不加入性ノ則に従ハヌノヲ喜ブ丁度 (+) (-) ノ電気ノ様ニ

43、十一月二十五日（保阪嘉内宛手紙）

この頃ハ誰れからも便りが無い、みんな夢の中ニ死んで了った様に思はれる、流れ流れて歩いてゐ

でも、やっぱり手紙を受けとる事の嬉しさを忘れない。宮沢や緑石から便りがないので、どうしたかと思ってる。宮沢が死ぬのちあないかなど、も思ふ事がある。

【大正十(1921)年】

44、四月二日(保阪嘉内宛手紙)

昨夜ハ賢治とお前と俺がなんでも川をカゴニ乗って如何かする処の夢を見た。夢だ。果敢ないと云ふ夢だった、がこの頃の自分ハマるで物事を本当の事と思へぬ程、すべてが夢のような淡いものである、感じが熱烈ニ来ないのだ。余程如何かしてゐる様な気がする、神経がすっかり魔痺して了つたのだらう。

【注】本資料は、宮沢賢治に関連する部分を抜き出したものである。

●保阪嘉内

注1:「短歌日記」(東雲堂発行)。引用は、保阪庸夫・小沢俊郎編『宮沢賢治 友への手紙』(昭和四十三年、筑摩書房)「参考資料」16頁。

注2:戯曲「人間のもだえ」。引用は、同上。18頁。

注3:「短歌日記」(東雲堂発行)。引用は、注1と同じ。19頁。

注4～9:「短歌日記」(東雲堂発行)。引用は、木村東吉『《春と修羅 第二集》改稿過程に見る詩歌観の展開』(平成十一年度～十四年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書)122,125,129,132,134,135頁。

注10～12:ノート。引用は、注1と同じ。33,34,42頁。

注13:宛先・岩手県盛岡市上田、盛岡高等農林学校生・河本義行様、差出人・東京市外上目黒五六四 第二有光館方・保阪嘉内。近森は義行の農学科第一部同期生の近森善一。『注文の多い料理店』の発行者。引用は、河本静夫編『書簡集 河本緑石 アザリアの友へ』(平成九年、緑石書簡集刊行会)12頁。

注14:引用は、大明敦編著『心友・宮沢賢治と保阪嘉内』(平成十九年、山梨ふるさと文庫)88頁。南部雪の友は宮沢賢治、山陰の友は河本義行、遠きアメリカにある友は小菅健吉。

注15:引用は、注1と同じ。139頁。

注16～22:「国民日記」(民友社版)。引用は、注1と同じ。178,180,181,181,181,182,183頁。

注23:『砂丘』第二号掲載。『砂丘』は、河本義行が参加した鳥取県の芸術団体・砂丘社の同人誌。引用は、さくら市史編さん委員会編『氏家町史 史料編 近代の文化人』(平成二十三年、さくら市)720頁。Kは小菅健吉、Mは宮沢賢治、Yは河本義行。

注24, 25:「当用日記」(積善館版)。引用は、注1と同じ。190,190頁。

注26:引用は、注14と同じ。128頁。Mは宮沢賢治。

●河本義行(緑石)

注27～29:「俳句日記」(東雲堂発行、大正五年版を転用)。引用は、河本緑石研究会『ふらここ』第10号(平成三十年八月)2,1,2頁。

注30:封筒なし。引用は、注13と同じ。22-23頁。

- 注31：宛先・東京市外中渋谷六二六木村方・保坂嘉内様、差出人・茅町鎌田方（移転）・河本義行。引用は、注13と同じ。28頁。
- 注32：宛先は同上、差出人・盛岡市にて河本義行拝。引用は、注13と同じ。30頁。
- 注33：宛先・甲斐国北巨摩郡駒井村・保坂嘉内様、差出人・盛岡市茅町鎌田方・河本義行。引用は、注13と同じ。38頁。
- 注34：宛先は同上、差出人・鳥取四〇ノ八・河本義行。引用は、注13と同じ。84頁。華世は、同人・鯉沼忍の妹で、嘉内の思い人。一明は、義行の長男。
- 注35：封筒なし。引用は、注13と同じ。92頁。恋沼は鯉沼の誤記だが、義行のイタズラ心かも知れない。
- 注36：封筒なし。引用は、注13と同じ。97頁。
- 注37：詩集『なやめる樹』収録。引用は、『「アザリア」の仲間たち』展図録（平成二十四年、さくら市ミュージアム）67頁。Hは保坂嘉内、Kは小菅健吉、Mは宮沢賢治。
- 注38：宛先・山梨県北巨摩郡駒井村・保坂嘉内様、差出人・河本義行。引用は、注13と同じ。104頁。
- 注39：宛先・K.Kosuge 357w Fulton St.Grand Rapids Mich U.S.A. 差出人・Japan.Yokohama・鳥取県東伯郡社村福光・河本緑石（送達不能により返送）。引用は、注13と同じ。113頁。

●小菅健吉

- 注40：封筒なし。引用は、注23と同じ。684頁。
- 注41：宛先・Mr.Kanai Hosaka・Komayemura Yamanashiken Japan・山梨北巨摩駒井村・保坂嘉内君、差出人・Kosuge 1634 Post st S.F. U.S.A. 引用は、注23と同じ。685頁。
- 注42：宛先・Kanai Hosaka・Komaemura Yamanashi Yokohama Japan・山梨県北巨摩郡駒井村・保坂嘉内殿、差出人・Kosuge 24th May 1634 Post st S.F. Cal. 引用は、注23と同じ。686頁。
- 注43：封筒なし。引用は、注23と同じ。692頁。
- 注44：宛先・Kanai Hosaka Esq・Yokohama Japan・山梨県北巨摩郡駒井村・保坂嘉内様、差出人・K Kosuge c/o 747 East 36th Sts Chicago Ill. Feb16th 21、引用は、注23と同じ。700頁。

*

以上の資料から見えて来る新たな問題点の幾つかを以下に述べる。

まず資料3の宮沢氏集よりの引用。『新校本宮沢賢治全集』第十六巻(上)の「作品関係資料」には「間接的に伝えられた書簡」として草野心平、宮沢清六によるもの、松田奎介からの聞書「異稿 植物医師」、伊藤清一による「農民芸術」の講演筆記録が収録されているが、保阪の「短歌日記」に記されたこの二首も、賢治が生涯に残した九〇〇余首に加えて、「間接的に伝えられた歌稿」として収録されてもおかしくないはずのものである。

また、資料22の斜線は「予定だったが来なかった、来たが会えなかった、会ったが心に期待していた「面会」とは背いた気持だった、などと考えられるが、その第三の意味にとれないだろうか、と編者は考える」とした保阪庸夫・小沢俊郎編『宮沢賢治 友への手紙』（前掲、184頁）の判読以来、賢治と嘉内との訣別のしるしとされてきたが、これまでほとんど取り上げられることのなかった資料23の存在は、二人が必ずしも訣別には至らなかったことの傍証になるのではないかと思われる。

資料27の俳句日記は、河本義行生誕120年、アザリア発刊100年にあたる平成二十九年に、義行の長男である一明の長男・義和によって発見された新資料である。大正六年七月十四日から十五日

にかけての岩手山登山は、これまで「銀河の誓い」と称されて、賢治と嘉内が「二人だけで行った、いや二人だけで行きたかったのだ」(菅原千恵子『宮沢賢治の青春—“ただ一人の友” 保阪嘉内をめぐって』平成六年、宝島社、37頁)などと強調されてきたが、漫画冊子『アザリアの咲いた本4』(平成三十年十月、彼方ヨウホ発行、11頁)でも示唆されたとおり、この登山が、これまで考えられていたように賢治と嘉内の二人きりではなく、数名で行われたことが記されている。また、嘉内と緑石が、同じ東雲堂発行の大正五年版・短歌日記と俳句日記をそれぞれ所持していたことも分かる。

*

全体として、保阪嘉内関連の資料が数多くみられるが、これはおそらくスクラップブックを作成するなどした保阪の保存に対する意識の高さに拠るもので、その保阪にしても、スクラップブックに大正十二年八月三十日までとあり、「河本義行編には散逸せるもの多きを遺憾とするものである」などとも記されているように、現存の資料が全てではない。のちの紛失もあったと考えるのが自然であろう。保阪は、賢治からの73通もの書簡を保管していたが、賢治への言及を考慮しなければ、河本の保阪宛書簡も61通ある。

昭和四十三年の『宮沢賢治 友への手紙』刊行以来、宮沢賢治と保阪嘉内を中心に進められてきた観のあるアザリア研究だが、平成十九年発足の河本緑石研究会が結成十年目に、その日記を発見し、藤田なお子「『銀河鉄道の夜』の水死と改稿—同人誌『アザリア』の交友の影響—」(『梅花児童文学』第25号、平成二十九年六月)が、河本の死を生前の賢治が知り得た可能性を示唆したように、今後も、各々の同人たちの関係者による更なる資料の発見が待望される。

本稿そのものについても、いま以上に資料が拡充され、様々な観点からの指摘がなされ、未来の『増補改訂版・新校本宮沢賢治全集』に収録されることを期待するものである。

※本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究C「作家の文学形成と『地方同学コミュニティ』の研究—井伏・高田と宮沢賢治の場合—:課題番号20K00331」)の研究成果に拠るものである。